

優秀修士論文概要

18世紀フランスにおける種痘論争と出版メディア

長谷部 圭 人

1796年に英国の内科医ジェンナーが牛痘接種に成功するまで、猖獗を極めた天然痘への画期的な対抗策として、天然痘患者の皮膚に表れる膿疱を未罹患者に接種させる医学技術、種痘（人痘）が脚光を浴びていた。しかし、フランス王国ではこの医学技術の導入をめぐり、18世紀フランス最大の医学論争である種痘論争が勃発した。ルイ15世統治期を中心に「種痘擁護論者 « inoculateur »」と「種痘反対論者 « anti-inoculateur »」の間で繰り返されたこの論争には、医療関係者のみならず文筆家や宗教関係者等、多様な文字文化の担い手が参加した。

従来の研究は、種痘擁護論者と反対論者の対立を同時代の啓蒙／反啓蒙の対抗関係に即して論じ、この論争のプロセスを天然痘撲滅に至るまでの歴史の前史に位置付ける目的論的視座に立つ傾向が強かった。しかし、両陣営の対立の背景にある複雑な力学を指摘したダルモン¹の修正説以降、種痘論争を単なる思想的対立として捉えることの限界が露呈されたため、近年の研究はジェンダー史や表象史等の学際的視角から、論争の社会的意義の再検討を試みている。他方、18世紀当時、論争という営為そのものが媒体たるメディアの規範や戦略を共有し、常に「公衆 « public »」との関係に規定されていたというリルティの指摘に鑑みれば、種痘論争の論者とそれを伝播するメディア、そして公衆の影響関係の実態は未解明のままであると言える。

加えてこの問題は、種痘論争が対象とする公衆とは一体誰を指しているのか、という疑問にも繋がる。「公衆 « public »」概念についてはハーバーマス『公共性の構造転換』（1962）のテーゼが政治文化史研究を中心に18世紀フランス研究で用いられ、医学界とメディアの関係についても適用されてきた。しかし近年、公共圏の概念には①権力からの独立性、②理性的性格、③出版文化の商業主義等の観点から疑義が提出されており、医学メディアに関しても再検討の余地があると言える。以上の問題意識を踏まえつつ、本論は18世紀フランスで飛躍的發展を遂げた出版メディアの分析を通じて、種痘論争の歴史的意義、ひいては18世紀フランスの言論空間における医学と公衆の関係の再解釈を試みた。

第一章では、天然痘が識別され、医療の対象となった16世紀から18世紀までを対象に天然痘と種痘をめぐる認識論的枠組の通時的な変化を語源論と科学認識論^{エティモロジー エピステモロジー}の双方の視座から分析した。「天然痘 « petite vérole »」という語彙については俗語（フランス語）における概念整備が17世紀末まで放置されていたが、医者²の言語文化がラテン語からフランス語に徐々に移行した18世紀初頭の辞書で綴りや指示対象の揺らぎが解消された。他方、複雑な経緯を辿って導入された「種痘 « inoculation »」の語彙については、定義確立の時期と種痘論争の時期が重なった結果、種痘の派生語に種痘論争に関連する多くの語彙が残された。

また、天然痘に関する医学認識の変遷に関しては、「病理学」・「症候学」・「治療学」というガレノス医学以来の区分に従って各々分析した。種痘の具体的技術（時期・場所・施術者・接種対象者・手法）

をめぐる認識の変化についても併せて分析した。

第二章では、モンタギュー夫人が種痘を「発見」した1718年からルイ15世が天然痘で死去する1774年までを三つの時期に分け、フランスにおける種痘論争の歴史的展開を両陣営の対立の背景にある党派的・社会的側面を重視しながら検討した。

1718～1754年の種痘論争は殆ど内科医・外科医によってのみ行われ、医学界の埒外や、英国やジュネーヴの医学界からの働きかけはほぼ無視されていた。しかし、オルレアン公フィリップの死後、種痘反対論が一転して優勢になったように、王権は論争を大きく左右した。また化学派・粉碎派論争や内科医・外科医論争のような他の医学論争で形成された派閥も対立の枠組を規定した。1730～1740年代に種痘論争は一時鎮静化したのが、ラ・コンダミーヌの演説『天然痘の種痘に関する覚書』等を機に1750年代に再び活性化した。

1754～1763年は最も広範に種痘論争が行われる時期となった。パリ大学医学部の内科医の大半は依然、種痘反対論を支持したが、種痘擁護論者も徐々に出現し始めた。また、オルレアン公がジュネーヴからトロンシャンを招聘し、娘に種痘を接種させたことで社交界に多くの追従者が生まれた一方、パリの内科医のトロンシャンに対する反感は、両陣営の対立を一段と激化させた。両者とも以前より公衆の関心を惹くことを重視し始めるなか、1763年に医学部と神学部の公式見解が出るまでパリ市内での種痘を禁じる裁決をパリ高等法院が発布したことで、論争の中心地は科学アカデミーからパリ大学医学部の委員総会へ移行した。

1763年～1774年の種痘論争は委員総会におけるプティを中心とする種痘擁護論派とド・レピーヌを中心とする反対論派各6名の報告書を介した議論を中心に展開された。医学部内の投票では種痘の黙認が支持されたものの、結局正式なデクレがパリ大学医学部から出されることはなかった。しかし、1774年にルイ15世が天然痘で死去し、ルイ16世と王太子が種痘を接種すると、種痘反対論を公然と主張する著作は殆ど消滅した。つまり、出版メディアを通じた種痘論争は、理性的議論に基づく合意よりも王権の強い影響力によって終焉を迎えたと言える。以上、第二章では政治権力から独立した理性的な学術論争としての種痘論争に疑義を呈し、その党派的・政治的性格を浮き彫りにした。

第三章では医学メディアの戦略分析を通じ、種痘論争に参加した論者と18世紀の「公衆 *« public »*」の関係を検討した。嘗ての医学書は殆どの場合、読者の増加を期待しなかったが、18世紀になるとフランス語で議論を展開し、公衆の目を意識するようになった。実際、種痘論争の論者は医学出版文化の発展に倣い、様々な戦略を取り始めた。医学書は短くなり、論文はソシャビリテの中で行われる演説との相互関係を意識し、パンフレットは文学論争の戦略を用い、書簡は名宛人と読者という二重の対象を意識するようになったという具合である。また、幅広い読者層を対象とする定期刊行物も種痘論争のメインストリームとなり、様々な役割を果たした。特に『ジュルナル・ド・メドゥサン』や『ガゼット・サリュテール』といった医学専門誌は、嘗て対抗関係にあったジャーナリズムをパリ大学医学部の内科医が自家葉籠中の物とし、自ら公衆の関心を惹くようになった証左と見做しうる。

同章の最後では、これらの出版メディアが読者として対象にした「公衆」概念を検討した。公衆は当初、王権などの政治的権威の意味に近い語彙として使用されていたが、ラ・コンダミーヌの演説を境にその意味内容が拡大したと考えられる。但し、ラ・コンダミーヌが教育を受けた男性に種痘論争の公衆を限定したように、論争の射程には常に限界が設定された。加えて種痘擁護論者／反対論者が各々に公衆の代弁者として振る舞ったために議論は錯綜し、最終的に出版メディアにおける種痘論争は公衆が形

成する公論ではなく、王権の意向によって終焉を迎えることになった。つまり、従来の政治文化史研究が主張してきた公衆の政治への強い影響力は種痘論争においてはほぼ発揮されなかったと見るべきだろう。また種痘擁護論者は全ての人間を被接種者と見做しつつも、孤児や植民地奴隷、民衆、そして時に女性を種痘論争の公衆から排除し、説得の対象としなかった。その結果、種痘論争において「公衆」は「公衆衛生」の成員としての被接種者と「公共圏」の成員としての論争のオーディエンスという異なる二つの指示対象を包含する両義的な語彙となったのである。

第四章では、18世紀フランスで唯一組織的な種痘導入に成功したブザンソンを中心とするフランシュ＝コンテ地方に照準を定め、種痘論争の地方的展開について考察した。まず種痘を推進した開明的な地方長官ラコレの就任以前から、地方アカデミーでアッタランとルヴァッシェの両名によってブザンソン独自の種痘論争が展開されていたことを解明した。更に同地で初めて種痘を行ったアイルランド人外科医アクトンにも焦点を当て、彼が起こした種痘事故とその事故をめぐるドゾトゥーとのパンフレット合戦の諸相を明らかにした。最後にアクトン騒動の渦中の1765年に出版された匿名論文の分析を通じ、同地の種痘キャンペーンがアクトン騒動の影響で、意志を持って接種する／させる貴族層から、農村地域の住民へ対象を変化させたことを解明した。農民を種痘の対象とする計画は18世紀の人道主義と通底する反面、彼らは説得すべき公衆としては認識されなかった。実際、同年に始まった内科医ジロの集団接種も、種痘に関する知識が殆ど無い状態の農民に実施されていたのである。つまり、フランシュ＝コンテ地方では種痘論争の公衆になることと種痘の被接種者になることの隔たりが顕在化していたということである。以上、本章では同地方のケーススタディと「公衆」の指示対象の二重化の問題を架橋しつつ、種痘論争の出版メディアと種痘実践の関係を詳解した。

以上、本研究は目的論的ナラティブに種痘論争の文化的・社会的意義を回収する立場から距離を置き、同時代的観点から種痘論争の多面的考察を試みた。結論としては、種痘擁護論者／反対論者の対立が理性／感情の二元論に還元できない様々な党派の対立を含む以上、この論争は政治権力から独立した理性的な議論とは言い難い。彼らはある時点から公衆の歓心も得ようとしたものの、論争における公衆の影響力には限界があり、そもそも多くの下層の人々は種痘論争の公衆から排除されていたことが確認された。その結果、革命以前のフランスにおける種痘論争の拡大と種痘実践の拡大には社会階層に基づく懸隔が生じたのである。